

---

# Youthful Days

浅葉りな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Y o u t h f u l D a y s

### 【Nコード】

N 3 8 7 5 C

### 【作者名】

浅葉りな

### 【あらすじ】

子供はなにも選べないのよ。ひとりでは何もできないの。ねえ…  
…あなたは、実の父親に「死んで欲しい」って思ったこと、ある？  
かつて、高校生だった頃。かなめは鬱病の父親の世話をしながら、  
暮らしていた。

シーツに散った紅の華。見るたび、いつも憂鬱になる。  
シーツの上だけじゃない。乾いてどす黒く変色した血は、畳までも汚している。

それなのに、なにごともなかったかのようにあのひとは眠っている。私の気持ちも知らないで。

いつそ、手首を傷つけたりするのなんかやめて、首をくくつてくれればいい。そんなことを考える。

もしかしたら、私は残酷なのかもしれない。私のような人間を、ひとは親不孝と言うのかも知れない。

でもそのひとたちは知らない。

子供はなにも選べない。私はもう十六にもなるけれど、ひとりではなにもできないものとされているのだ。私たちはいつだって、大人の言いなりでいるしかない。たとえ、こんな父親であっても。

私はため息をついて、台所へ向かった。完全にしみが取れたりはいないだろうけど、このままにしておくにはいけないだろう。

遅い。

私は腕時計を見つめつつ、軽く舌打ちした。

朝、登校したら、靴箱に手紙が入っていた。同じ部活にいた、高田先輩からの手紙だった。

綺麗な文字でたったひとこと、放課後、裏庭に来て欲しいとだけあったから、私は指示通りに裏庭に来た。

それなのに、もう3時だ。まだ先輩は来ない。

多分、これは愛の告白と言っやつなんだろうと思う。少女まんがでよくあるようなシチュエーション。

私は1年生のとき、テニス部に在籍していた。そこそこ楽しかったし、好きだった。部員とも仲がよくて、中でも、男子テニス部で

主将をしていた先輩とは、家が同じ方向だったこともあってよく話をしたりしていた。

でもその頃、母親が私の中学卒業と同時に出て行ってから、少しずつおかしくなっていた父が、ついに境界を越えた。

自殺をはかったのだ。手首を切って。

そのときは私が早くに発見したから、大事には至らなかった。どうしてそんなことをするのかと問い詰めても、父はあいまいに笑うだけで、答えてはくれなかった。

父はもう会社もやめてしまっていたから、私は生活費のために働かなくてはならなかった。母からは定期的に、雀の涙くらいの送金があったけれど、そんなものじゃ全然たりなかった。高校生のアルバイトなんてたかが知れているけれど、それでもないよりはずっとましだ。

だから、もう先輩との縁は切れたはずだった。もう1年近くが過ぎていく。それなのにどうして、今更。

そう思いはするけれど、無視するのも忍びない。いや、それ以上に面倒だ。

時計を見る。もうすぐ3時半になる。

私はまたため息をついて、歩き出した。これ以上は待てない。

去り際にふと、気まぐれで2階を見上げた。窓に人影があった。

見たことのある連中だ。

あれは、テニス部の

そう、先輩たち、だ。男ばかり3人で、私をずっと見ていたのだろうか。中には私を手紙で呼び出した、高田先輩本人の姿もある。

目があうと、高田先輩は顔をそむけた。

冗談にしてはたちが悪すぎる。

馬鹿正直に待ちぼうけをくらわされていた私を、嘲笑っていたのだろうか。

そんなことをしたいのだったら、もう少し、見つからないように工夫すればいいのに。いつそおかしかった。

私はすぐに前を向いて、苦笑しながらその場を去った。

これくらいで傷つくような神経をしているのなら、とっくの昔に死んでいた。そんなことも知らずに、なにを馬鹿なことをしているのだろう、と思う。

先輩のことは、すぐに意識の外に出てしまった。今日はバイトの給料日だ。いくら出るんだっただのか、頭の中で計算してみる。

いつからこうなってしまったのだろう。恋愛よりもなによりも、お金のことが大事だなんて。

バイト先では、そんなふうにお金のことを考えていたら失敗してしまうから、頭を切り替えて動いた。ここで働けなくなったら、大変だ。

「……かなめ」

閉店間際、注文を取りに行ったら声をかけられた。ふと見ると、帽子を目深にかぶった高田先輩が、ひとりでした。

「ご注文は？」

ポケットから伝票を出しながら、私は訊ねる。

「今日のことは本当にすまないと思ってる」

「ご注文は？」

もう一度、繰り返す。

謝られても苦笑するしかない。私はまったく気にしていないし、なにより、今更、だ。

こんなところで謝ってきて、いったいなにを考えているのだろう。せめて手紙だとか、もう少し人目につかない方法を選べばいいものを。

「すまなかった」

私は、ため息をついた。黙って続きを待つ。

「傷つけるつもりはなかったんだ。最初は行くつもりだった。でも、さ。部のやつらに見つかって」

わかるだろ？ とでも言いたげに、先輩は首を傾げた。

まるで小学生のよう。私はまた、ため息をつく。

先輩のことは嫌いではない。でも特別に好きというほどでもない。だから私は傷ついたりはしなかったし、もうさほど気にしてもしなかった。

「気にしてませんから。ところで、注文、なさいますか？」

「あ……ごめん。コーヒーを」

「コーヒー、ですね」

注文を繰り返し、伝票に打ち込む。

「よかった。許してくれて。それで……その、もしよかったらなんだけど、つきあってくれないかな……？」

「ご注文は以上でよろしいですか？」

私はそれだけ言った。

それで充分だった。先輩もそこまで愚かではない。

軽くうなだれながら、うなずく。

私は伝票をエプロンのポケットに入れる。これで終わり、だ。

これがあともう少し早かったら、私もOKしていたかもしれなくてももう遅すぎる。

私はもう無邪気ではいられなくなってしまった。特別不幸だとは思わないけど、余裕がないのは確かだろうとも思う。

そのまま無事に閉店時間を迎え、私は店長から給料袋を受け取った。

全然、たりない。

でもそのあまりの軽さに、私はわかっていたとはいえ、落胆を隠せなかった。

高校生の稼ぎにしては多い方だ。けれども、これで生活費も学費も家賃もまかなわなくてはならないのかと思うと、ちっとも多い気がしない。

どうしたらいいのだろう。

私がないをしたと言っのだろう。

ため息がこぼれる。

普段は夜道を歩くのは少し怖かったけれど、今日はそれどころで

はなかった。

街灯のないところだつて、今なら平気だろうと思う。

たとえばその電柱の影から、悪漢が出てきて私を刺殺したとしたらどうだろう。楽になれるだろうか。

そんなくだらないことを思う。

どうしようもない。

私はどうしたらいいと言つただろう。

「ねえ、きみ」

振り向くと、かたそうな鞆を抱えたおじさんがおどおどと私を見ていた。

年はだいたい、四十前くらいだろう。白髪混じりで、どこか疲れしているような感じに見える。

「なんですか？」

「おじさんと一緒に、ちょっとごはんでもどうかな？ あ、もちろんお金は払うよ。これくらいでどうかな」

おじさんは指を三本立てた。三万……か。

それだけあれば、当座はしのげる。

こういうのを、援助交際、というのだろうか。

少し抵抗がある。でも、背に腹は変えられないし、それも仕方のないこと、なのかもしれない。

別に、ごはんを食べるくらいなら、いいだろう。私はゆっくり、うなずいた。

「じゃあ、なにが食べたいかな？ なんでもいいよ」

OKしたとたんにおじさんは急に馴れ馴れしくなつて、私の腕をつかんでくる。触らないで、と思ったけれど、それを口にする代わりに笑う。

「別に、なんでも」

「そのマクドナルドでいいかな？ それとももつといいところに行

こうか？」

「……いいよ、マックで」

そこなら外からよく見えるから。

おじさんは本当に嬉しそうに笑った。

これだけ喜んでもらえるのだったら、いいかな、とも思う。

いつまでもこんなところで立っただけでも仕方ないから、私はおじさんの腕を取って、マツクに入った。

おじさんとはしばらく普通に雑談をして、別れた。携帯の番号とメルアドを交換した。またいつでも連絡してね　と言われたけど、多分、もう連絡はしないだろうなと思う。

こういうのは、一回きりだからいい。二度、三度と会うのだったら、どこかのお店でなじみの女の子を作るとか、愛人を囲うとかすればいいのだ。携帯番号とメルアドを走り書きしたメモ用紙は、帰る途中で捨ててしまった。

帰宅してみるとあの人は相変わらず、ぼっつとしてている。

本当に生きているのだろうか、疑問に思う。

こうして寝て起きて、また寝て。無理に食事を摂らされて。その繰り返し。

ブロイラーと違わないんじゃないだろうか。

失礼、なのかもしれない。こういうことを考えるのは。

医者にもよく言われる。こういう病気の治療は、ご家族やご友人のみなさまの理解が不可欠です　と。

でも、わかっていない。

これが私が母親で、あの人が息子なんだというのだったら、きっと、大丈夫なんだろうと思う。

私にはよくわからないけれど、誰にでも、母性本能というのがあって、子供だったらいくらでも庇護できる、そうだから。

でもあの人は私の父親だ。

なにもしてくれないし、むしろ手間ばかりかけているけど、それでも、私の父親であることに変わりはない。

私があの人を理解してあげて、庇護してあげないといけないのだとしたら、私はいつたい、誰に庇護してもらえばいいと言うのだから。

う。

そうして生活しているうちに、すぐにもらったお給料はつきた。そんな頃だった。また、あのおじさんから電話がかかってきた。今度は5万出すよ、とか、だからホテルに行こう、とか、そんなことを言われた。少し考えさせて、返事はあとで電話するね、と言って切った。

ホテルねえ……と思う。

あのおじさんには、たしか、私と同じくらいの息子がいたはずだ。息子と同じくらいの女の子としたいって思う、その気持ちは私にはよくわからない。

制服が好きなら、奥さんに制服着せてればいい、のじゃないのだろうか。わざわざお金を払ってまで、女子高生を買うのは、本物志向だからなんだろうか。

でもまあ、いいのかな、とも思う。

私は多分、わからなくてもいいんじゃないかなと思う。わからない方がいいんだろう。

折り返し電話をかけて、8万出してくれるなら、と言った。

おじさんはすぐに、ホテルの場所とルームナンバーを告げてきた。ラブホテルかと思っただけけど、そんなじゃなくて、ちゃんとしたシティホテルらしい。

なんでそんなところで、とは思っただけけど、深く追求はしない。今求められている私は、つまり、ただの「女子高生」なのだ。ものを考える必要なんかない、偶像みたいな、中身のないモノでいい。さすがに制服で行くわけにはいかないから、制服をかばんにつめて、私服で出向く。

おじさんはそわそわした様子で、ベッドにふちに腰かけていた。

私が入ると、顔を上げて、気まずそうに笑った。

「おなか、空いてるかな？」

「べつに」

おどおどと訊ねられると、なんだかむかついた。

どうしてこの人は、怯えているみたいな態度を取るんだろう。

私はこの人になにもしやしないうつていうのに。

「着替えてくる」

「え？ 着替えるって……なにに」

「制服。」

「あ、いいよ、そんな……汚れるから」

言ってから、おじさんは口を抑えた。

ばつが悪そうに笑う。

まったく、よくわからない。

自分から電話をかけてきたんじゃないだろうか。この人は。

私をここに呼んだのは、つまり、そういうため。

それを今さら、どうして照れたりするんだろう。わからない。

「そのままでもいいよ」

おじさんのしなびた手が、私の手首をつかむ。

人の指の、感触、だ。

そういえば久しぶりだと思う。

あの人は私に世話をされている間だって、ほとんど無反応なのだ。

私からあの人に触ることはあっても、その逆はない。

だからなんとなく、懐かしいような感じがした。

「どうしたの？」

「どうもしないわ」

そのときに、胸の奥に、ちりりと痛みがはしる。

けれども私は痛みなど知らないふりをして、笑った。

《了》

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3875c/>

---

Youthful Days

2010年10月8日15時20分発行